巻　頭　言

大阪医科薬科大学看護学部 教授　竹村　淳子
（Junko Takemura）

本雑誌は，大阪医科薬科大学看護学部における教員等の研究成果を広く看護界に発信し，看護学の向上と発展に寄与することを目的として，看護学部が開設された年度に創刊され，この度，第15巻が発刊されました。

2024年の大きなニュースは，元旦に発生した最大震度7の能登半島地震をはじめとした各地での地震災害と，我慢の限界を超えるような夏の暑さでした。年々夏の厳しい暑さを体感しますが，昨年の猛暑日は観測史上最も長く続きました。また，各地で大雨による災害も多発しました。このような災害が起こるたび，「何十年に一度」という言葉を聞きますが，それは「今後，何十年は起こらない」ということを保障するものではありません。とくにここ数年は，毎年何らかの自然災害が起こり，地球環境の異変を実感します。このような異変は，地球規模の気候変動として世界でも深刻な問題となってきました。

地球温暖化は以前から問題視されていましたが，国際的な取り組みが必要と認識され，1995年には気候変動に関する国際連合枠組条約締約国会議が第1回目の会議としてベルリンで開催されました。これは大気中に排出する温室効果ガス濃度が気候に悪影響を及ぼさないよう安定化をめざすもので，現在も取り組みは続いています。

地球規模の気候変動はさまざまな災害をもたらし，人々の健康にも影響が大きくなると予想されています。日本で災害と看護の関連が強く印象付けられた出来事としては，1995年に発生した阪神・淡路大震災がありました。多数の人が同時に医療を必要とする状況，持病のある人々の健康維持，被災環境がもたらす健康被害など，人々の健康に関してたくさんの課題が浮き彫りになりました。その後，看護分野で「災害看護」が誕生し，2017年には災害看護専門看護師の認定が始まりました。今後はさらに広い視野で人々の健康を支える研究を充実させる必要があると考えます。

研究は社会的に必要な事柄に応えることも必要です。災害に関する研究もその1つでした。看護学は人々の生活を健康の側面から支えています。現実社会で起こっていることに対して，看護学がどのように貢献できるのかを考えると，これまでにない新しい視点や発想が必要かもしれません。本雑誌が新しいテーマの研究を後押しする役割を担い，看護学のさらなる発展を遂げられますことを祈念いたします。

大阪医科薬科大学看護学研究雑誌の発刊にあたり，ご尽力いただきました編集委員会の皆様に感謝申し上げます。